

H30 校内研究反省のまとめに対する見解

研究の成果と課題

(1) 学校のグラウンドデザインと校内研究との方向性の一致

反省の中にもあったが、今年度、学校経営グラウンドデザインの「合言葉」と共通になったことで、授業研究だけでなく、学校の行事や学校生活の様々な場面で研究テーマが意識されるようになった。そうすることで、「ひびき合う 三の丸の子どもたち」にむけて、研究授業だけでなく、年間を通して子どもたちを育てる努力がしやすくなったのではないかと考えられる。運動会を始めとし、代表委員会や、わくハイの異学年集団でのひびき合いも、意識的に行われている部分がたくさんあった。

また、「合い言葉」について、5月の朝会で子どもたちに話をした。「ひびき合う姿がどんな姿であるのか。」「そのためにどんな力をつけたらよいのか？」など写真を用いながら具体的に伝えることができた。その朝会での話を踏まえ、教師と子どもが同じ姿をめざして授業に臨めたことが、とても有意義であった。次年度も、子どもたちとめざすところを共有しながら、学校教育全体で「ひびき合い 三の丸の子どもたち」を育てられるようにしていきたい。

(2) 授業を見合うことで学ぶ教師の姿勢

本年度は、研究便りとして、研究推進便りとは別に研究主任として発行していたものがある。時折ではあるが、授業での教師の立ち位置、子どものみとりについてなど、研究に必要な考え方や見方を書いてきた。そして、その中でも、互いに授業を見合うことの大切さも伝えてきた。個学や低学年では教室をあけるのが難しい部分も多いが、研究授業の単元を中心に、また学年団やブロックの職員同士で、授業を見合い、検討を重ねることができていた。また中学年や高学年では、研究授業以外の授業でも、互いの教室の壁を越えて参観し合い、放課後授業について話すなどの機会も多くあった。さらに、研究授業以外の単元で、さらにもう一本単元構想を書き、授業実践・公開までを行うクラスもあった。「他のブロックの研究授業ももっと見に行きたかった。」などの声も多く上がっており、「授業をみて学びたい」という本校職員のニーズにできるだけ答えられるように、今後、日程等を工夫していきたい。しかし、ALTなどの予定もあるので、なかなか難しい。特に来年は予定がタイトである。授業研究でない日でも互いのクラスを参観し、よいなと思う実践の一つでも多く出会い、一つでも多く学べるようにすることを推進していきたい。

(3) 学級経営検討会について

学級経営検討会については、多くの先生方に「参考になった。」「よかった。」という感想をいただいた。特に、若い先生たちには、「書き方」「実態に対する手立ての組み方」「校内研究と学級経営のつながり」「年間の見通し」など、様々な要素が参考になっていることがわかる。また、専科やTTの先生方から、多角的に学級の実態や子どもの様子について見ていただくことで、自分にはないものが見えるなどの利点もある。互いの学級経営について具体的に、客観的に情報交換したり、アドバイスしあったりすることで、学ぶこともより増えてくると考えられる。

学級経営検討会が有意義なのは、何も「若い」先生たちだけではない。「自分の学級経営のうまくないところをなんとかするにはどうしたらよいのか？」という、問題意識をもつ全先生たちにとって有意義になのである。裏を返せば、「まあまあうまくいっている」といった問題意識のないところには、あまり有意義にならない会となる。自分なりの問題意識を持って、学級経営検討会に臨むことができるように、今後は声をかけていく。あくまでも検討であり、発表ではない。形骸化していかないように努力していく。

また、第一回目の検討会では、子どもの実態やそれに対する手立ての話が中心となるが、そこが授業と直結する子どもの雰囲気や文化を生み出す源であるので大切にしたい。あくまでも研究とつながっていることを意識づけるためにも、この形でつづけていきたい。

(4) 「子どもが解決したい問題」「ひびき合う姿」の共通理解

昨年度の反省を踏まえ、「ひびき合う姿」については、具体的にどんな姿なのかを夏の研修で各ブロックで分かれて、模造紙に付箋を貼りながら、全職員で創り上げる作業を行った。それによって、今までもさらに詳しく、言葉や表情、思考場面など

の詳細なイメージが整理された。そのことで、授業でじっくり思考しながら考えを深めたり、広げたりしていく子どもの姿を追うことができるようになった。

一方で、「子どもが解決したい問題」については、課題がある。「子どもが解決したい問題」が成立している条件として3つあげているが、反省の中では「いくつかを満たしている」というものが多かった。自由記述の中を分析すると「事実にもとづく問題」という部分が欠けているものがほとんどであった。「事実にもとづく」は、現実の事実であるのかどうか、叙述にあることなのかどうか、といったものであり、ほとんどの授業で扱った問題は「事実にもとづく」ものであったように記憶している。ただ、この条件を書かないことで、「なぜ大きなからは大根でないのか？」といった事実にはない問題が追究の対象になり得ないことをさせている。したがって、この3つの条件は、全て満たして初めて「子どもの解決したい問題」となることを再度確認したい。

3 三の丸の研究のこれから

「ひびき合う 三の丸の子どもたち」に向けて、子どもの思いを大切にし、子どもの思考の流れに沿って構成する授業が、子どもにとっても教師にとっても楽しく、やりがいのある授業になっているのではないかと思う。そうして継続されてきた三の丸の実践そのものを見ていただけるように、努力していきたい。研究発表ありきでなく、三の丸ありきで。

4 今後の予定

別紙参照